

Culture in Psychiatry



ジュリアン・グリーン 『アドリエヌ・ムジュラ』

高橋 正雄 筑波大学名誉教授

1927年にジュリアン・グリーン(1900~1998年)が発表した『アドリエヌ・ムジュラ』¹⁾には、フランスの田舎町で、圧制的な父親と病弱な姉のもとで息の詰まるような生活をしてきたアドリエヌという娘が、恋愛問題を契機に病的な世界に陥っていく過程が描かれている。

幼くして母を亡くしたアドリエヌは、「自分の安楽のためにしか生きていない父親と、自分の病気のことしか考えていない姉に育てられた」こともあって、父親の機嫌を損ねはすまいかということばかり恐れて生きていた。また、姉のしかめた眉を見て育ったために、「あまり笑わないことと、口数を少なくすることを習いおぼえてしまった」彼女は、「遊び友だちもなければ、ひとと交際したいというはっきりした欲望もなく」、一人で庭を散歩したり自分の部屋に閉じこもって、幼少期を過ごしたのである。

そんな孤独で単調な日々を送るアドリエヌが18歳になったとき、彼女は近所に引っ越してきた医師に一目惚れするのだが、この頃から彼女にはさまざまな症状が出現するようになる。

このとき以来、30分として安らかに食べたり、眠ったり、じっとしていることができなくなった彼女の瞳には「なにかしら陰鬱な色が忍び入っていた」。「頬からは血の気がまったく引いて、唇はほとんど白かった。肩のあたりに鈍痛がして、まるで重い荷物でも背負っているように、体を少し前かがめていなければならなかった」。また、「むせび泣きが突然彼女の体を揺り動かし、彼女をびっくりさせた」と、自分でも制御できない唐突な感情発作にも襲われて、「気がちがいそうだわ」という発狂恐怖にも襲われるようになる。

さらにアドリエヌには、「とりとめもない考えが、勝手に頭の中を右往左往しているように思われた」という自動思考や、「なにかしら、自分を自分の体から引き出そうとするものがあつた」という自我障害を思わせる症状、「家や樹々が、目の前でゆっくり、右に傾いたり、左に傾いたりした」という知覚変容や、「みんながあたしを見ている」という注察妄想的な症状、「多くのものが、彼女をうかがい、暗くなり次第彼女の上に襲いかかろうと

していた」という外界の侵害感を伴う被害念慮なども出現するのだが、失神発作を起こしたのを契機に彼女は件の医師の診察を受けることになる。

このとき彼女を診察した医師は、「鬱病にとりつかれないように、用心しなくてははいけません」、「あなたは非常に神経質な方です、お嬢さん。あなたはだんだん憂鬱症が昂じてきています」と警告して、次のような助言をする。「今までのように、たった一人で、だれにも会わないような生活をなさっているのは、あなたには非常にいけないことなのです」「今までよりもずっとずっと、自分の心をひとに打ち明けようとしなくてははいけませんね。あなたの胸の中には、必要のないものがたくさん鬱積しているのです。いつも内へ内へと自分の心の中にばかりこもろうとなさるので、必要のないものがのさばってくるのです」「外に出て、町の人たちと知合いになり、忙しい生活を送る決心をなさらねば、あなたは決して幸福にはなれません」。

果たして、これらの対応がうつ病の予防や治療としてどこまで有効なのか、いや、そもそもアドリエヌの病